

V. 教官(員)に対するアンケート調査のまとめ

昨年までアンケート調査は紙ベースで行ってきたが、今回はインターネットを用いて実施させていただいた。回答欄への記入に一部不具合があり、担当いただいた先生方にはご不便をおかけしたが、今回も昨年と同様に 80 大学すべてから回答いただくことができた。ご多忙の中、協力していただいた先生方に御礼を申し上げたい。

I. 全般的な実施状況について

「満足」との回答が 58%で、昨年(59%)とほぼ同程度であったが、一昨年(68%)よりは 10%減少した。これは、学生からの回答と同様の傾向である。一方、「不満」と「少し不満」は 29%で、昨年より 2%、一昨年より 8%増加した。問題別に見ると、一般問題、臨床問題、必修問題ともに「適切」との回答が昨年および一昨年より減少していた。特に、必修問題については、一昨年より 21%、昨年より 3%減少しており、落ち込みが大きかった。この点も学生からの回答と同様の傾向である。コメントを見ると、削除問題が今までになく多かった点や難易度に関する指摘が多かった。「不適切」と感じた分野についても、多数の意見が寄せられている。

新形式問題については「適切」との回答が昨年より 23%増加し、批判的なコメントも減った。問題数の配分については、76%が「適切」との回答であった。

大学での成績と国試の相関については、「相関がある」との回答は 81%で、一昨年より 7%少なくなっているものの、昨年と同じ数字であった。今回は、成績上位者からの不合格者が前回より目立つ、とのご指摘もいただいた点が昨年とは異なる。学内での成績と国試との相関を示すデータは 17 大学から提供いただき、掲載したので参考にさせていただきたい。貴重な資料をご提供いただいた大学には感謝を申し上げたい。

II. 医師国家試験の問題について

臨床実習の成果が反映される問題の出題について聞いたところ、70%が「適切」と回答し、「もっと増やした方がよい」との回答が 74%であった。臨床実習で必要な病態生理や解剖などの問題について、「もっと増やした方がよい」との回答は 80%であった。一方、在宅医療や地域医療に関する出題については、「もっと増やした方がよい」との回答は 44%に止まり、現状でよいとの意見とほぼ拮抗していた。救急医療の現場に関する出題については、「もっと増やした方がよい」との回答は 60%であったが、現行でよいとのコメントも相当数見られた。

III. 国家試験のあり方について

1. 実施時期については、89%が現状でよい、との回答であった。
2. 医学部定員増と関連して、合格基準について聞いたところ、現行が「適切」との回答は 63%、現行では「不適切」および「少し不適切」との回答が 35%あった。「どのよう

に変更すべきか」との問に対しては、現行の相対基準ではなく、絶対基準による判定にするべきである、との意見が目立ったが、合格基準を厳しくすべきである、易しくすべきである、安易に変更すべきでない、などの意見もみられた。

3. 3. 国試の受験者数だけでなく、出願者数を公表することについて聞いたところ、「適切」との回答が73%、「不適切」と「少し不適切」との回答が13%であった。不適切と回答した方に理由を聞いたところ、公表の意義がよく分からないとの回答が多かったが、出願者の公表によって卒業判定(内定)の時期を変更する大学が出る、とのコメントもみられた。
4. 4. 第104回国試への受験者を最終決定した日を聞いたところ、願書の出願締め切りである11月26日より前と答えたのは11校(14%)、それより後と答えたのは69校(86%)であった。具体的な時期について個別に回答いただいたが、最も早い時期は10月下旬であった。11月末までに決定するのは12校あった。
5. advanced OSCEの実施状況について聞いたところ、実施しているとの回答が昨年より6校増えて55校となった。しかし、「実施予定なし」は10校、未定が23校あることも明らかとなった。
6. 仮に、advanced OSCEを国家試験として取り入れる場合、どのように標準化するのがよいか、聞いたところ、大学間共用試験実施機構に委託する、厚生労働省が同様の組織を立ち上げて標準化を図る、など様々な意見をいただいた。一方、実施の前に卒業時の臨床実習到達目標を明確化することが先決である、標準的な臨床教育が徹底されていない本邦では各大学が実施するOSCEでは標準化はできない、アメリカのECFGMとNBMEの検討結果では、試験センターで専用スタッフによる試験として行わない限り医師資格試験としての標準化は不可能、との結論が出ている、医学部定員増への対応だけでも大変な状況の中で、医学部臨床系教官の負担をこれ以上増やすことは避けるべきである、等々、様々な問題も提起された。

IV. 卒前教育における臨床実習の質を高めるために

卒前教育における臨床実習の質を高めるために医師国家試験をどのようにしたらよいか、との設問に対しては56件の意見をいただいた。代表的なものを列挙すると以下のようになる。最近の医師国家試験は量・質ともに増加し、学生の負担が過大となり、それに対応するために6年生の教育が影響を受けている現状があるので、これを改善するために、医師国家試験の問題は基本的な事項を聞く問題を中心とし、ブラッシュアップによってクオリティの高い良問を精選して出題することが重要である。現在採用されている相対基準による合否判定では、必ず一定数の受験生が不合格となりため、試験が資格認定ではなく、競争(選抜)になってしまうという弊害が起こるので、以前行われていたような絶対基準による合否判定に戻すべきである。臨床実習の成果については、ペーパーテストではなく、実技試験によって判定すべきである。この他にも、多くの貴重なご意見をいただいている

ので、参照願いたい。

V. 「医師国家試験のあり方全般について、改善のための提案やご意見、厚生労働省や関係機関に対する要望や意見」

この項には、毎年、多数のご意見をいただいているが、今回も 44 件の貴重な意見をいただいた。本年は、国家試験のあり方を見直すべきである、とのご意見が特に多かったように思われる。なお、合格発表の早期化に関するご意見もいただいたが、7月1日付けの官報によると、来年実施される第 105 回医師国家試験の合格発表は平成 23 年 3 月 18 日とのことで、例年により 10 日前後早く合格発表が行われるようである。